

壬生義士伝

浅田次郎

ト





文春文庫

©Jiro Asada 2002

みぶぎしでん  
壬生義士伝 下

定価はカバーに  
表示してあります

2002年9月10日 第1刷

2002年12月20日 第5刷

著者 あさだじろう  
浅田次郎

発行者 白川浩司

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102-8008

TEL 03・3265・1211

文藝春秋ホームページ <http://www.bunshun.co.jp>

文春ウェブ文庫 <http://www.bunshunplaza.com>

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-764603-X

壬生義士伝  
下

浅田次郎

文藝春秋



壬生義士伝 下



## (承前)

慶応二年の四月朔日ついたちのことであつたと思う。

日付まではつきり覚えておるわけは、その数日前に出張先の芸州から参謀の伊東甲子太郎かしたろうと筆頭監察の篠原泰之進たいのしんが帰り、慰勞の宴うたげを催した晩だからじゃ。宴中、伊東が芸州における諸藩重臣たちとの議論の成果を開陳し、「時節もよし四月朔日、今日を以てわれら憂国の志士は気分も新たに云々うんぬん——」などと、鼻白むようなことを言うておつた。

伊東はお世辞にも劍客とは言い難いが、一流の論客であつたことには疑いようはない。なにしろ鼻白みながらも、奴の弁舌はこうして耳に残っておるのじゃから。伊東のことは、まあよい。奴との関わりをしゃべって、話を長くしたくはないから。

ともかく、四月朔日じゃつた。もつとも、古い曆じゃから花などはとうに散つた、今でいうなら五月のなかばにあたるころであつたと思う。

まるで革衣かわごろもを頭から被ったような、生温い、真暗な晩じゃった。島原角屋すみやでの宴が引けたあと、何人かの隊士が連れ立って祇園へと流れた。

誰がおったのかな――。

わしと沖田。永倉、原田。そして谷三十郎。ほかに二、三人が一緒じゃったと思うが、吉村はいなかった。

今さら言いわけなどしても始まらぬ。しかしわしはその夜、谷三十郎の始末をつけるつもりなど毛頭なかった。考えてもいかなかったと言うてもよい。

祇園に先導したのは三十郎じゃ。奴は介錯に失敗して以来、わしらにひどく氣遣っておった。当たり前じゃがの。

折あらば主だった隊士たちと酒を酌み交わし、少しでも溝を埋めようという肚積はらうきりがあったのじゃろう。わしがとんでもない介錯の方法を教えたことについては、三十郎もさぞかし恨んでいたのであるが、むろん口に出すはずはなかった。

三十郎の行きつけの茶屋でしたたか飲んだ。その夜の奴は、われらの接待に終始するあまり、あたかも幫間ぼうかんのごとくであった。

誰もがその立ち居ふるまいに、うんざりとしておったよ。盃が進むうち、わしは居並ぶ面々の視線が、時おり意味深げに向けられていることに気付いた。沖田も永倉も原田も、盃を舐なめながらちらりちらりとわしを見るのじゃ。



わしの思いすごしかもしれぬよ。

やがて時の経つうちに、どういうわけか一人また一人と、座敷から消えていった。永倉は明日の巡察に差し障るからと言うて、早々に帰った。原田は廁かわやへ行くと席を立ったきり、戻ってこなかった。ほかの連中もいつの間にかいなくなり、気が付けばほの暗い行灯あんどんを囲んで、わしと沖田と三十郎だけが飲んでおった。妓おんなもおらなかつたのは、わしらの常ならぬ空気を察知して、逃げてしもうたのかもしれぬ。

じゃが、その期ごに及んでも、わしは三十郎を斬ろうとは思ひもしなかつた。おそらく虫の居所がよい晩だったのであろう。

酒を飲みながら、沖田はやはりちらりちらりとわしを見た。で、そのうちようやく気付いたのじゃよ。沖田は肚はらの中でこう言うていた。

(どうする、一君はじめ。僕がやろうか。それとも、君がやるか)

わしは三十郎の目を盗んで沖田を睨み返した。

(俺がやるよ)

そう言うたつもりじゃった。

三十郎を斬りたかつたのは、わしひとりではあるまい。奴は何とかわしらを懐柔しようとして一席もうけたのじゃが、どっこい誰もそのような手には乗らなかつたということじゃ。わしと沖田は、みなからこの美味なる馳走を譲られたことになる。

きて、そうと決まればあとはどのようなにして三十郎を誘い出すかじゃ。わしと二人きりでは、三十郎も警戒するであろう。かと言うて、おのれの手並みを沖田に見届けられたくはなかつた。

わしはふと妙案を思いつき、しごく改まってこのようなことを言うた。

「いやはや谷先生。拙者はぜひとも先日の一件をそこもにお詫びせねばなりません。問われたときはとっさに洒落だと思つたのです。ですから拙者もとっさに、洒落を言い返してしまいました。まさか谷先生ともあろう達者が、その洒落を真に受けてしまわれるとは——」

沖田の手前もあるから、三十郎は空とぼけおつた。「何の話、ですかな」などと。かたわらの沖田も、「おいおい、何の話だい」などととぼけておつた。

そこで、わしは言うたのじゃ。

「すまんが総司君。拙者はこれから谷先生に折り入って詫びねばならぬことがある。拙者が馴染みにしておる女のところで飲み直そうと思うが、君は席をはずしてくれ」

三十郎は何の疑いも抱くふうがなかつた。むしろ願つてもないことじゃとでもいうように、相好を崩しおつたよ。

「ああ。例の、石堀小路のおなごだな。あれは天下一品の好い女だ。谷さんもぜひ

ひとめ拜んでくるといい」

沖田の奴、調子をくれおった。そのころわしが石堀小路の休息所に囲っておった女は、沖田も知っていた。気の好いばかりが取柄の、天下一品の醜女しごめじゃったがの。茶屋を出て、いったん四条の通りに向かい、一力いちりきの前で沖田を送った。

「なら、ここで」と、沖田は笑った。実におかしそうな高笑いじゃった。

「沖田先生、お気を付けて帰られよ」

と、三十郎は他人のことを心配しておったな。沖田は立ち去りながら言うた。

「なあに、二人より一人のほうがよっぽど安心です」

すれすれの洒落に、わしはぎよっとさせられた。思わず三十郎の顔色を窺うたよ。じゃが、三十郎のばかたれはまだ気が付かぬ。

沖田を見送ると、わしらはひとけの絶えた真夜中の四条通を、祇園石段下に向かって歩き出した。むろん、わしは三十郎の右側を歩いた。

人斬りにはころあいの、新月の晩であったよ。

朱塗りの隨身門ずいじんもんを、篝火かがりびがあかあかと照らし出しておった。その門を抜けて、木々の鬱蒼うっそうと生い茂る祇園社の境内をめぐれば、東山安井の石堀小路は近い。

早う休息所に行つて、思うさま女を抱きたかった。

虫の居所がよかったせいもあるうが、その夜のわしは三十郎を斬るたの娛しきよりも、

こんな奴はさつきと片付けて女を抱こうなどと考えておった。

三十郎を斬ることは馳走にはちがいないが、みなからその馳走を譲られたことが、内心は腹立たしかつたのかもしれない。

石段下の南の角には番所がある。じゃが、奉行所の木っ端役人こぼなど物の数でもないわ。

通りすがったとき、夜詰めの同心ちようちんが提灯を持って飛び出してきた。わしらのだんだら染めの隊服を見ると、きょうびの新兵のように直立不動となつて、足元が暗いのでこの提灯をお使い下さいと言つた。

わしは「要らぬ」と答えた。そのぶつきらぼうな物言いが、ちとまずかつた。

三十郎は、おやと思ひ付いたようにわしの横顔を見、同心の手から提灯を受け取つた。

そのとき奴は、よもやと思つたのであろうよ。番所の前を去つて石段を登りかけるころには、すでに様子がおかしかつた。提灯でおのれの足元を照らしながら、わしとは一間いっけんあまりも間を置いていたからな。

そのさきは、ぶつつりと話が絶えたと思う。

隨身門をくぐるとき、三十郎はわしに道を譲つた。馬鹿な奴よ。歩みのあとさきでおのれの身が守れるとでも思うたか。面と向かえばわしと互角に立ち合えるほど

の達者でもあるまい。

門を抜けると、あたりは楠くすのきの大樹に蓋おほわれた闇じゃった。石段が六、七段。それを登ると、左右に一對の狛犬こまいぬ。祠ほくらの並ぶ参道に沿って常夜灯籠じょうやとうろうがづらなっておったが、蠟燭ろうそくはおおかた燃え尽きていた。

三十郎の怯おそえきった息づかいが聴こえた。今にも走って逃げ出しそうな気配を感じて、わしは歩きながら言うた。

「谷先生。先日の件は衷心ちゆうしんよりお詫びせねばなりませんね」

その一言で、奴はほうっと息を抜いたようじゃった。よかった、思いすごしだった、とな。

思いすごしであるものか。わしが他人に頭を下げて詫びるなど、あるはずもなからう。

奴のほっとした顔を、手にした提灯のあかりが照らし上げておったよ。

「いやいや、何も改まってそのような——」

言いかけたなり、奴の顔は紙のごとく真白になった。

せめて抜き合わせる間を与えてやろうと思ひ、わしはゆっくりと刀の柄つかに手をかけたのじゃよ。じゃが、三十郎は棒のようにつっ立ったまま、凍えついておった。

次の瞬間、わしは抜き打ちに胴を払い、ああ、ああと愕おどろくばかりの三十郎の脇を

すり抜けた。どうやらおのれが斬られたとは、とっさにはわからなかつたらしい。胴の上下かみしもがはずれるほどの深手であるのに、奴は提灯を手に持ったまま、血が噴きこぼれる足元を見つめて、ああ、ああと呻いておった。まるで粗相をした子供のようであつたな。

往生際が悪いというのは、ああいうことであろう。どうと倒れるはずのものが、いつまでも背を向けてつつ立っておるから、わしは少々気味が悪くなつての。で、左の背から心臓をめがけて、突きを入れた。

とたんにずりりと膝がくだ摧けおつた。体がわしの刀に吊る下がる格好になり、おかげで刀身がはばきもと鉦元から曲がつてしもうた。

あつけないものじゃつたが、刀が鞘に収まらぬのには少々あわてたな。まさかぬき抜身をひつ提げて女の家をおどの訪うわけにもいくまい。石段の縁に刀身を添えて踏んづけ、ようやく真直ぐにしてから鞘に収めたものよ。

まあ、飲め。

酒は会津の大銘物、飲むほどに酔うほどに甘くなる。

ああ——石堀小路のおなごというのは、たしかに天下一品の醜女ではあつたが、どうしてどうして、なかなか好い女じゃつた。

美しいおなごは嫌いじゃ。そもそも人間はみな醜い糞袋じゃからの。他はたから美しいといわれ、おのれもまた美しいと信じておるおなごは、鼻持ちならぬ。むろんその妙な自信の分だけ質たちも悪い。

じゃからわしは、おなごを買うときもつとめて醜女を選んだ。少なくとも、そうそう客もつかぬほどの醜女ならば、男に尽くしてくるからの。

石堀小路の女は——ああ、名は何と言うたか、失念した。むりに思い出す要もあるまい。

そやつは氣立てのよいおなごじゃった。わしが人を斬ってきた晩には、血の匂いでそうとわかるのであるろうか、とりわけよく尽くしてくれたものじゃ。

わしがあの夜、三十郎を真向まっこうから斬らずに胴払いをくわしてすり抜けたわけは、返り血を浴びたくなかったからなのじゃよ。血を浴びたままおなごを抱くのは、不粹ふさいであろう。

わしは三十郎を斬ったその足で、何事もなく女の家に行った。

休息所と称して女を囲っておる隊士については、それを所帯と認め、泊まりも許されておった。

ただし朝稽古の始まる時刻までには、屯所に入らねばならぬ。翌あくる朝は未明に起

き出して家を出たが、まさか祇園社を抜けて四条通を行く気にはなれず、五条橋を渡って西本願寺の屯所に向かった。

果たして、御太鼓樓の門をくぐると、北集会所しゅうえしよの屯所は上を下への大騒ぎじゃった。わしが到着するほんの少し前に、奉行所の役人が変わり果てた谷三十郎を戸板に乗せて、担ぎこんできたというわけじゃ。

玄関を上がりかけたとき、やはり休息所から出勤してきた永倉に声をかけられた。「何だ、騒々しい。何かあったのか」

そういう言い方はあるまい、とわしは永倉を睨みつけた。

「谷さんが斬られたとか」

「ほう」

永倉新八は気性の素直な男じゃから、芝居は苦手らしい。せめて大仰に愕くふうをしてもらわねば困る、とわしは思った。

「どうした、どうした。何があったのだ」

と、永倉は大根役者の棒読みで呼ばわりながら、屯所に入っただけだ。

はて、ならば下手人のわしはどのようなように振る舞うべきであろうか、とわしは思ったよ。さしあたっては騒ぎに加わるべきなのじゃろうが、常日ごろからあまりあわてふためくということがないので、それもいささかわざとらしい。かと言って、落ち着き



払っておるのも怪しかろう。

そうこうするうちに、御太鼓樓の門から原田左之助が駆けこんできおった。

「斎藤君、谷先生が何者かに斬られたというのは本当かつ」

これも大根役者じゃった。考えに考えあぐねた末の台詞せりふというふうじゃったな。いくら何でも、「何者かに斬られた」は蛇足じゃろうとわしは思つたよ。

この際、余分なことは考えずに自然体で参ろうと思ひ、屯所の外廊下を歩いていくと、今度は沖田に行き合つた。奴はあんがい役者じゃ。

「やあ、一君。ちよつと困つたことが起きたんだけど、聞いたか」

「谷先生だろう。愕いたな」

「僕と別れて、あれからどうしたんだい」

「休息所でしたらしく飲んで、送つて行こうと言つたんだが、ひとりで帰つてしまつた」

それでよい、というふううなずに沖田は肯いた。わしは自信を持つたよ。もはや三十郎は、わしひとりひとりが斬つたわけではあるまい。幹部一同の総意によつて、肅清されたのじゃ。

近藤がどう出るかはわからぬ。じゃが少なくとも土方以下の、三十郎を快く思つていなかつた隊士のほとんどは、よしんばわしを疑つたとしても口に出す者はおる